

# 夕日のある風景

牧草泉

男は決して忘れない  
「海が見える小さな町なの 夕日が素敵だわ」  
そうしてやさしい手書きの電話番号を  
男は小さな町に行った  
公衆電話のボタンに触れたのに  
指が動かなかった  
「どうして押さないの？」  
あの人の声が耳元で聞こえた  
何度も押しそうとした  
指は硬直して動かなかった  
一人で海辺の夕日を眺めた  
海の彼方に沈み行く夕日は美しかった  
「あの人が傍にいてくれたら」  
ふと男は思った  
漁船の明かりが黄昏の中に  
蛍のように彷徨っていた

小さな町に何度も行った  
そうして海を眺めた  
男は夕日の思い出を胸に歩き続ける  
でも男は知らない  
風が 夕日の思い出を  
そつと置き去りにしたことを

## 北へ

故郷を去りゆく流離い人  
”石もて追はるるが如く”

右の頬には

姫神山の冷たい視線を

左の頬には

岩手山の温もりが

岩手山は哭いている

もはや戻ることはない故郷

なぜに北へ

室生犀星は心で慕った

北行き人は雪を抱く

掴みたい故郷

持ち去りたい故郷

帰りたい故郷

北行き人は  
姫神山の雪解けを待つ

## カルネアデスの板

遠い海に笑っている

遠い山に泣いている

そこには

老いを知らないおまえがいる

老いたおまえはどこにいるのか

どんな絵を描いたのか

どんな軌跡を辿ったのか

雲よ  
知っているなら教えてほしい

二人で過去をさらけ出し

物差しで心を計り

天秤で過去を測って

そうして確認したい

あのとき

二人で掴もうとしていたのは

カルネアデスの板ではなかったことを